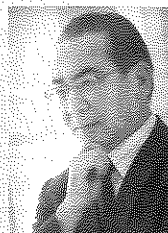


～ 昨日の風 明日の風 ～
**経営コンサルタント
独白録**

〔第59回〕 リアルな「外国」と時代変化



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター（福岡市、URL <http://sien.co.jp/>）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

先日広島に行って、新幹線の駅からホテル界限や訪問先に移動する際、数多くの西欧人を見かけて驚きました。福岡や大阪でも外国人を目にすることは当たり前になりましたが、比率としては中国や韓国などの東洋人が多く、これほどの西欧人の旅行客を見かけることは稀です。その辺の事情をタクシーの運転手に尋ねたところ、昨年のオバマ大統領の広島訪問以来、西欧人の姿を多く目にするようになったということでした。

日本に住んでいると原爆被災の施設など当たり前のように考えてしまいがちですが、世界の人にとっては改めて平和を考えるモニュメントとしての意味を持っていることを知りました。限られた地域に住み、偏向した報道などでは伺い知ることのできないひとつの新しい時代の姿を見たような気がしました。

時代変化の一端

中国出身の企業家、経営コンサルタント、経済・経営評論家である宋文洲氏のコラムに以下のような中国に関する記述があります。

（引用）

同じ飲食産業でも先日深センで社員が楽になって顧客が満足する風景を見ました。着席するとウェ이터がやってきてテーブルに置いてある二次元バーコードを指して「ご注文はこちらからどうぞ」と言った後、20分間の砂時計をひっくり返して「上の砂がなくなるまで食事が揃わない場合、食事が無料になります」と言って去りました。

二次元バーコードを携帯でスキャンして写真付きのメニューから食事を注文し、食事後にそのまま携帯で支払うのです。注文取りなし、レジなしです。社員がやることはクレーム処理や老人や子供の手伝いです。（引用ここまで）

コラムの本旨は、日本の労働生産性の低さと働き方改革のずさんさを批判したものでした。特に経営者の時代変化に対する意識の低さを指摘する中で、引用したような文章を書いていた。

日本は遅すぎる？

頻繁に外国へ出かける若い経営者たちが、時折日本の経営上の速度の遅さを嘆くのですが、その理由の一端を見たような気がしました。

「この国の時代変化に対する感度の鈍さはひどすぎます。いずれ資本がこの国から流れ出て行くような気がします」と、先日若い経営者がそうした話をしてくれました。

数年前、日本の製造機械の売り上げが落ち込んだ時期がありました。ライバルであるドイツ企業との競争に負け始めたというのです。理由を調べると海外企業が製造機械の制御系入力をタッチパネル方式に変更している時に、日本企業は相変わらずキーボードだったというのです。役員会でそのことを叱責された若い開発者が「何年も前にタッチパネル導入を開発会議で提案しているにもかかわらず、ベテラン達がそんなもの！と言い捨て、製品化できなかった」と述べたそうです。世界の潮流や時代変化を読み違えたという事例かもしれません。

極東の島国だからこそ

日本で生活をしているのだから、外国のことなど知る必要は無いと考えることもできなくはありません。実際に日本の輸出依存度はGDP比で10数%と少なく、内需依存型経済です。ただこうしたリアルな外国の姿を知ると、それだけでは将来を見渡せないのではないかという気もします。テクノロジーとインフラの発達は我々の想像を遥かに超えた速度で進んでいます。経営者として経営幹部として広い視野と大いなる向上心を奮い立たせ、時代変化の最前線に立つ勇気が求められています。

テレビの画面やパソコンのディスプレイの中に現実があるわけではありません。お気楽なニュースキャスターの発言の中に本質があるわけでもありません。様々な場所に自ら出かけ、様々な人の話を聞き、自分自身のアンテナを目一杯伸ばし、時代変化を感じておく必要はありませんか？